

大学生が認知した両親の夫婦関係が共感性と 向社会的行動に与える影響

—親の養育態度を媒介変数として—

山内美香¹・長谷川晃²

(1:東海学院大学大学院人間関係学研究科, 2:東海学院大学人間関係学部)

要 約

本研究では、両親の夫婦関係と養育態度の認知が大学生の共感性と向社会的行動に及ぼす影響を検討した。大学生 226 名を対象に質問紙調査を行い、各変数を測定する質問紙に回答を求めた。共分散構造分析の結果、両親の夫婦関係は両親の温かい養育態度に正の影響を与え、過干渉に負の影響を与えていた。また、母親の温かい養育態度は大学生の共感的関心と想像性に正の影響を与え、過干渉は大学生の個人的苦痛に正の影響を与えることが示された。媒介分析の結果、両親の夫婦関係の良好さは、母親の温かい養育態度を強めることによって共感的関心の増加を導き、母親の過干渉を弱めることによって個人的苦痛を低下させることが示唆された。更に、大学生の共感的関心は向社会的行動に正の影響を与え、個人的苦痛は負の影響を与えていた。以上より、両親の夫婦関係の良好さは、母親の養育態度を介して間接的に共感性や向社会的行動と関連することが示唆された。

キーワード: 夫婦関係, 養育態度, 共感性, 向社会的行動

(2019.9.12 受稿 査読審査を経て 2019.11.15 受理)

問題と目的

子どもにとってはじめて関わりをもつ他者は親であるため、親の養育態度が子どものパーソナリティや精神的健康などに大きな影響を与えることが容易に想像できる。先行研究では、親の養育態度が子どもに与える影響について盛んに検討が行われているが、それらの研究では親の養育態度を測定する尺度として、Parental Bonding Instrument(PBI; Parker, Tupling, & Brown, 1979)が用いられることが多い。PBIは16歳までに体験した父親と母親の養育態度を、成人に達した子どもの記憶に基づいて測定する尺度であり、子どもに愛情を感じさせる支持的な親の養育態度を反映する「温かさ(care)」と、子どもを束縛し、親の意思に沿うようにコントロールしようとする養育態度を反映する「過干渉(over-protection)」という2下位尺度から構成される。

多くの先行研究において、PBIで測定される親の養育態度の2側面とうつ病や抑うつとの関連が検討されている。例えば、日本人労働者を対象とした調査において、

質問紙で特定された大うつ病性障害の経験者は未経験者よりも、母親の養育の温かさが低いことが示された(Sato et al., 1997)。また、新入社員の女性を対象とした調査では、過去に2年以内の大うつ病エピソードを1回経験したことがある群は経験したことがない群よりも、父親の養育の温かさが低いことが示された(Kitamura et al., 1998)。更に、田中・高橋・酒井・眞榮城・菅原(2010)は、9-18歳の参加者を2年間追跡し、一時点目に測定された、その時点で参加者が認知していた母親の養育の温かさがその後の抑うつの低下と関連することを見出した。

また、先行研究では、両親の養育態度だけでなく、両親の夫婦関係も子どもに大きな影響を与えることが明らかにされている。高橋(1998)は、「両親間の愛情」と「両親間の葛藤解決」という2下位尺度から構成される子どもの評価による両親間の関係尺度を作成した上で、中学生が知覚した両親の夫婦関係が中学生の精神的健康に与える影響について検討した。その結果、両親の夫婦関係の2側面の良好さは、中学生の両親に対する親和性の増加を介して中学生の精神的健康の改善に影響を与えるこ

とが示された。更に、鈴木・徳田(2009)は子どもの評価による両親間の関係尺度を用い、高校生が評価した両親の夫婦関係が高校生の精神的健康に及ぼす影響について検討した。その結果、両親間の愛情と両親間の葛藤解決という2下位尺度から構成された「夫婦関係」という潜在変数が、家族機能の良好さ(家族成員間のコミュニケーションやまとまりの良さ、相互の評価や柔軟性の高さ、およびルールの明確化や遵守といった諸側面; 西出, 1993)を介して不安の低下と関連することが示された。

両親の夫婦関係は子どもに対する養育態度にも影響を及ぼすことが示唆されている。菅原他(2002)は、子どもが誕生してから11年目の夫婦を対象に調査を行い、夫婦の相手に対する愛情と子どもに対する養育態度の温かさや過干渉との関連について検討した。その結果、父親の母親に対する愛情と母親の父親に対する愛情はそれぞれ、各親の子どもに対する養育態度の温かさに正の影響を与えることが示された。

先述の通り、多くの先行研究により、両親の夫婦関係と養育態度が子どもの精神的健康に及ぼす影響について確認がなされているが、その影響の強さを考慮すると、両親の夫婦関係と養育態度が子どもの他の心理的変数にも影響を与えていると考えられる。本研究では、これらの2要因が子どもである大学生の共感性に及ぼす影響について検討する。

共感性は対人行動を規定する重要な心理的変数である。共感性の下位分類については様々なモデルが提案されているが、対人反応性指標(Interspersal Reactivity Index: IRI; Davis, 1980)によって測定される4つの下位分類が採用されることが多い。IRIは、他者の苦痛の観察により自己に生起される不安や恐怖にとらわれてしまう程度を測定する「個人的苦痛」、同情などの他者指向的感情の喚起されやすさを測定する「共感的関心」、他者の視点に立ってその他者の気持ちを考える程度を測定する「視点取得」、物語などのフィクションの登場人物に、自分を置きかえるよう想像する傾向を測定する「想像性」の4因子から構成される。

IRIを用い、尺度間の相関係数を算出した先行研究の結果から、共感性の4側面のうち、共感的関心と視点取得は向社会的行動の増加と関連することが示唆されている(菊池, 2008)。また、攻撃性の下位側面との関連については、共感的関心は敵意、身体的攻撃、言語的攻撃と、視点取得は短気、敵意、身体的攻撃と負の相関が認められている一方、個人的苦痛は短気、敵意、身体的攻撃と

正の相関が、言語的攻撃と負の相関が認められている(日道他, 2017)。更に、共感的関心は特性不安と負の相関が、自尊感情と正の相関が認められている一方、想像性は特性不安と弱い正の相関が、個人的苦痛は特性不安と正の、自尊感情とは負の中等度の相関が得られている(日道他, 2017)。

先行研究では、親の養育態度と子どもの共感性の関連についても検討が行われている。浅野他(2016)は中学生を対象とした調査を行い、親の養育態度が、共感的関心と視点取得から構成された共感性の潜在変数に及ぼす影響について検討を行った。その結果、親の受容的な養育態度と、子どもに基本的な生活習慣や道徳性を身につけさせる働きかけをする統制的な養育態度が、子どもの共感性に正の影響を与えることが示唆された。

以上のように、国内で行われた先行研究では、親の養育態度が子どもの共感性に与える影響について検討が行われているが、その数は少ない。また、筆者が知る限りでは、両親の夫婦関係が子どもの共感性に及ぼす影響について検討がなされていない。前述の通り、共感性は対人行動に影響を与える重要な変数であるため、その変容方法を確立することには、実践的な面から考えて意義がある。両親の夫婦関係や養育態度が共感性の規定因であるのかを検討することにより、共感性を高めるために、両親の夫婦関係や養育態度に着目することが有効であるのかが示唆されるだろう。

そこで本研究では、大学生を対象とし、その集団において示される共感性の規定因の候補として、両親の夫婦関係と養育態度を取り上げ、それらの影響を検討する。更に本研究では、共感性との関連が繰り返し確認されている向社会的行動も取り上げ、両親の夫婦関係と養育態度および大学生の共感性が向社会的行動に与える影響について検討を行う。両親の夫婦関係や養育態度は、子どもである大学生の精神的健康を初めとする様々な心理的変数に影響を与えることが示されており(e.g., 堀・長谷川, 2018; 嘉手納・今井・嶋崎, 2004; 宇都宮, 2004, 2005)、大学生は依然として親から強く影響を受けている年代であると言える。そのため、大学生が示す共感性や向社会的行動についても、両親の夫婦関係や養育態度によって影響を受けていることが予想される。

本研究で検証を行う仮説は以下の通りである。まず、菅原他(2002)が行った調査の結果、夫婦間の愛情度が高いほど、父母ともに子どもに対する養育態度が温かくなることが示されている。両親の夫婦関係が良好であると、

お互いに頼り合うことで子育てに対しての不安が解消され、夫婦の精神状態も安定することから、子どもに対して温かく接することができると考えられる。そのため、大学生が認知した両親の夫婦関係の良好さは、両親の温かい養育態度と正の関連が認められると予想される(仮説 1)。次に、中学生が評価した親の受容的な養育態度が、中学生の共感的関心と視点取得から構成された共感性の潜在変数に正の影響を及ぼすことが示されていることから(浅野他, 2016), 両親から温かい養育がなされた子どもは、温かいと感じる行動をよく知り、相手がどうして欲しいのかを理解することができるため、相手の立場で考え、他者に対する温かい感情が生起されやすくなると考えられる。そのため、大学生が認知した両親の養育態度の温かさは、共感的関心や視点取得と正の関連が認められると予想される(仮説 2)。続いて、両親が子どもに対して、自分の意志を押し付けたりコントロールしたりするなど、過干渉に接することで、子どもは自らの意志決定を迫られた時や苦痛に対する対処の仕方について学ぶことができないため、他者の苦痛を目の当たりにした際にどう対処したら良いのか分からず、同様の苦痛を感じてしまうと考えられる。そのため、両親の過干渉は個人的苦痛と正の関連が認められると予想される(仮説 3)。最後に、先行研究では、共感的関心と視点取得は向社会的行動と正の相関が認められているため(菊池, 2008), 本研究でも同様に、共感的関心と視点取得は向社会的行動と正の関連が認められると予想される(仮説 4)。

方法

調査対象者

東海地方の4年制大学と短期大学部に在籍している大学生・短期大学生 251名を対象とした。全調査対象者のうち、回答に不備があったものを除外した 226名(男性 100名, 女性 126名, 平均年齢 19.84歳, $SD = 3.22$)を有効回答者とした。参加者の多くは、心理学科で開講されている授業の受講者であるが、それ以外の授業の受講者も含まれている。

質問紙の構成

子どもの評価による両親間の関係尺度(高橋, 1998) 子どもから見た両親の夫婦関係を測定する尺度であり、両親の愛情関係と両親の葛藤解決の2下位尺度から構成される。15項目からなり、各項目に対して、「1. ほとんど当てはまらない」から「4. かなり当てはまる」までの

4件法で回答を求めた。得点が高いほど、子どもによって評価された両親間の愛情や葛藤解決の程度が高いことを示している。回答を求める際に想起を求める時期を、後述する PBI と一致させるため、回答者が 16 歳以下の年齢であった時の親の夫婦関係について回答を求めた。また、本尺度は中学生用に作成された尺度であるため、ひらがなの文字を適宜漢字に変換して用いた。下位尺度毎に合計得点を算出し、分析で用いた。

Parental Bonding Instrument 日本語版 (PBI; Kitamura & Suzuki, 1993) 子どもから見た親の養育態度を評価する尺度であり、Parker(1979)が作成した尺度を Kitamura & Suzuki(1993)が翻訳した日本語版を用いた。本尺度は温かさと過干渉の 2 下位尺度から成り、父親と母親の養育態度についてそれぞれ回答を求めた。本尺度では、回答者が 16 歳以下の年齢であった時に体験した両親の養育態度について回答を求めた。父親の 25 項目と母親の 25 項目に対して、「0. 全く該当しない」から「3. 該当する」までの 4 件法で回答を求めた。下位尺度毎に合計得点を算出し、分析で用いた。

日本語版対人反応性指標 (Japanese version of Interpersonal Reactivity Instrument: IRI-J; 日道他, 2017) 共感の特性を複合的に測定する尺度であり、Davis(1980)が作成した尺度を日道他(2017)が翻訳した日本語版を用いた。本尺度は個人的苦痛、共感的関心、視点取得、想像性の 4 下位尺度から構成される。全 28 項目に対して、「1. 全く当てはまらない」から「5. 非常によく当てはまる」までの 5 件法で回答を求めた。下位尺度毎に合計得点を算出し、分析で用いた。

向社会的行動尺度(菊池, 1988) 回答者が向社会的行動を行う頻度を測定する尺度である。全 20 項目に対して、「A. したことがない」から「E. いつもした」までの 5 件法で回答を求めた。A から E まで順番に 1 点から 5 点までを割り振り、全項目の合計得点を算出し、分析で用いた。

手続き

調査は大学の講義室で行った。授業の終了後に受講者に対し調査への参加を依頼し、質問紙調査実施の前には調査への協力は任意であり、協力することで個人を特定することや成績に反映されることはないこと、回答の途中であっても不都合が生じた場合止めても構わないこと、調査のデータは数量化されるため、個人の特定期間や情報が公開される恐れはないことを説明した。これらの内容に同意した者に対して、質問紙に回答を求めた。なお、カウ

Table 1 各尺度の記述統計量

	<i>N</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>α</i>
子どもの評価による両親間の関係尺度				
両親の愛情関係	206	18.43	6.06	.91
両親の葛藤解決	203	16.24	4.52	.82
Parental Bonding Instrument 日本語版				
父親の温かさ	203	22.85	7.84	.91
父親の過干渉	203	12.10	6.21	.79
母親の温かさ	217	26.09	7.51	.92
母親の過干渉	219	12.21	7.27	.86
日本語版対人反応性指標				
個人的苦痛	220	22.96	5.03	.80
共感的関心	222	23.41	4.87	.77
視点取得	222	21.49	3.92	.60
想像性	221	23.31	5.27	.78
共感性合計	219	91.15	12.87	.83
向社会的行動尺度	215	56.07	16.62	.93

ンターバランスをとるために、子どもの評価による両親間の関係尺度、PBI(母親)、IRI-J、PBI(父親)、向社会的行動尺度の順番で質問紙を綴じ込んだ冊子と、その逆の順番で綴じ込んだ冊子の2種類を配布した。本研究の実施内容については、東海学院大学「人を対象とする研究」に関する倫理審査委員会より承認を得た。

結果

Table 1 に各尺度の記述統計量を、Table 2 に尺度間の相関係数を示した。次に、親の夫婦関係が養育態度を介して大学生の共感性および向社会的行動に及ぼす影響について、共分散構造分析を用いて検討した。分析はMplus 8.1(Muthén & Muthén, 1998-2017)で行った。欠損値については、完全情報最尤推定法を用いて処理を行った。まず、子どもの評価による両親間の関係尺度の2下位尺度の相関が強く、他の尺度との相関において類似した結果が得られたため、その2下位尺度を観測変数とし、その2つの観測変数によって「夫婦関係」という潜在変数を構成した。次に、夫婦関係から他のすべての尺度にパスを引き、PBIの4下位尺度から共感性の4下位

尺度、および向社会的行動にパスを引き、IRI-Jの4下位尺度から向社会的行動にパスを引いた。また、PBIの4下位尺度の誤差変数間に相関を仮定し、IRI-Jの誤差変数間にも相関を仮定した。なお、共感性と他の変数との関連を検討した先行研究の中には、性別の影響を統制したものがあがる(e.g., 櫻井他, 2011)、本研究におけるサンプルサイズと内生変数に影響を与える変数の数を考慮し、性別の影響を加味せずに分析を行った。このモデルの適合度は、 $\chi^2(8) = 12.60, p = .13, CFI = .99, RMSEA = .05$ であった。その結果をFigure 1に示した。

夫婦関係は父親の温かさと母親の温かさに正の影響を与え、父親の過干渉と母親の過干渉に負の影響を与えることが示された。母親の温かさは共感的関心と想像性に正の影響を与えることが示された。母親の過干渉は個人的苦痛と想像性に正の影響を与えることが示された。共感的関心は向社会的行動に正の影響を与え、個人的苦痛は向社会的行動に負の影響を与えることが示された。

夫婦関係が母親の養育態度を介して共感性に影響を与えているのか検討するために、ブートストラップ法による媒介分析を行った(リサンプリング回数 10,000回)。なお、95%CIはバイアスを修正した値(bias-corrected

Table 2 各尺度間の相関係数

	1	2	3	4	5	6
1. 両親の愛情関係	—					
2. 両親の葛藤解決	.67 **	—				
3. 父親の温かさ	.44 **	.50 **	—			
4. 父親の過干渉	-.14 *	-.27 **	-.54 **	—		
5. 母親の温かさ	.35 **	.37 **	.43 **	-.33 **	—	
6. 母親の過干渉	-.29 **	-.35 **	-.40 **	.56 **	-.66 **	—
7. 個人的苦痛	.02	-.13	.03	.04	-.02	.19 **
8. 共感的関心	.16 *	.11	.17 *	-.13	.24 **	-.15 *
9. 視点取得	.06	.13	.10	-.08	.11	-.13 *
10. 想像性	-.01	-.08	.05	-.01	.04	.09
11. 共感性合計	.08	-.00	.13	-.07	.13	.20
12. 向社会的行動尺度	.19 **	.14	.16 *	.00	.05	-.03

	7	8	9	10	11	12
1. 両親の愛情関係						
2. 両親の葛藤解決						
3. 父親の温かさ						
4. 父親の過干渉						
5. 母親の温かさ						
6. 母親の過干渉						
7. 個人的苦痛	—					
8. 共感的関心	.38 **	—				
9. 視点取得	.02	.38 **	—			
10. 想像性	.39 **	.27 **	.10	—		
11. 共感性合計	.70 **	.75 **	.50 **	.70 **	—	
12. 向社会的行動尺度	.02	.44 **	.28 **	.12	.30 **	—

** $p < .01$, * $p < .05$.

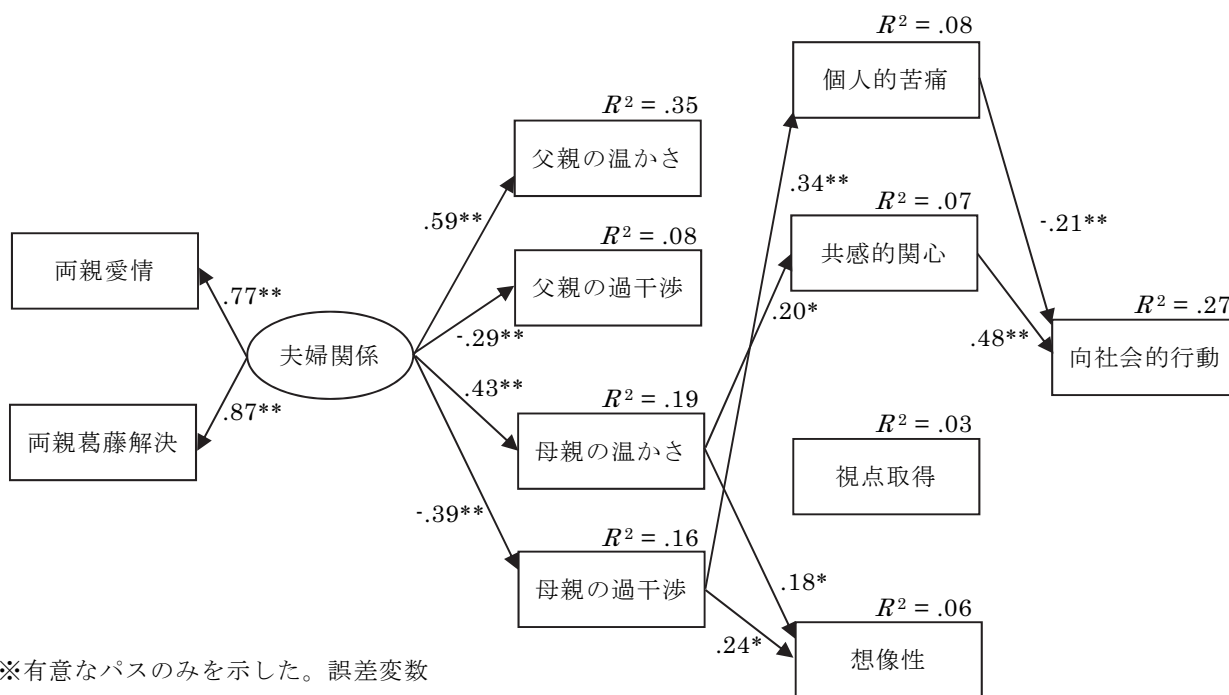
bootstrap)を用いた。その結果、夫婦関係は母親の温かさを介して共感的関心と想像性に正の影響を与え(共感的関心：標準化間接効果 = .09, 95%CI[.02, .20]；想像性：標準化間接効果 = .08, 95%CI[.01, .18])、母親の過干渉を介して個人的苦痛と想像性に負の影響を与えることが示された(個人的苦痛：標準化間接効果 = -.13, 95%CI[-.26, -.05]；想像性：標準化間接効果 = -.10, 95%CI[-.22, -.02])。更に、向社会的行動を従属変数とした媒介分析の結果、夫婦関係は母親の温かさ共感的関心を介して向社会的行動に正の影響を与え(標準化間接効果 = .04, 95%CI[.01, .11])、母親の過干渉と個人的苦

痛を介して向社会的行動に正の影響を与えることが示された(標準化間接効果 = .03, 95%CI[.01, .07])。¹

考察

本研究では、両親の夫婦関係の認知が、両親の養育態度を介して大学生の共感性と向社会的行動に与える影響

¹他にも標準化間接効果が有意なものが認められたが、いずれも独立変数から従属変数に至るまでのいずれかのパス係数が有意ではなかったため、ここではそれらの結果を省略する。



※有意なパスのみを示した。誤差変数と誤差変数間の相関については省略した。

** $p < .01$, * $p < .05$.

Figure 1 共分散構造分析の結果

について検討を行った。以下では共分散構造分析の結果に基づいて考察を行う。

最初に、両親の夫婦関係と養育態度との関連について考察する。両親の愛情が深くかつ葛藤解決能力が高い夫婦関係は、父親と母親の温かさに正の影響を与えていた。そのため、仮説1は支持された。この結果は、夫婦間の愛情度が高いほど、子どもに対する両親の養育態度が温かいことを示した菅原他(2002)の結果と一致している。夫婦において、愛情関係を維持することは、お互いを信頼し、頼りあうことにも繋がると考えられる。そのため、子育てに対する不安や問題に夫婦二人で立ち向かうことができると考えられる。更に、夫婦の精神状態も安定すると考えられるため、子どもに対して優しく声を掛けたり、ほほえみかけたりする温かい養育態度で接することができるのだろう。

また、本研究では両親の夫婦関係の良好さが両親の過干渉に負の影響を与えていた。子育てにおいて子どもが自分の思い通りにならないことや、思いがけない行動を起こすことで、親は大きなストレスや葛藤を抱き、子どもに対して過干渉な態度をとってしまうことがあるだろう。しかし、両親の夫婦関係における葛藤解決能力が高

い場合、子育てに対する葛藤に対しての解決能力も高いのではないかと考えられる。そのため、両親の夫婦関係の良好さが両親の過干渉にも影響を与えるのだと考えられる。

次に、両親の養育態度と子どもの共感性との関連について考察する。両親の養育態度のうち、母親の養育の温かさは子どもの共感的関心に正の影響を与えることが示され、仮説2は一部支持された。母親からの温かい養育を受けた子どもは、母親から温かく声を掛けられたり、抱えている悩みについて理解を示される経験を得ることにより、他者指向的感情を抱くモデルを観察する機会が増える。そのため、自身も他者志向的感情を抱きやすくなり、共感的関心の高さに繋がるのだと考えられる。

一方、本研究では、仮説2とは異なり、両親の養育の温かさは、相手の立場からその他者を理解しようとする認知傾向である視点取得と有意な関連が認められなかった。つまり、両親から温かい養育態度を受けた子どもは、他者志向的感情を抱きやすくなるが、相手の視点に立って考える能力が養われる訳ではないことが示唆される。

また、母親の過干渉は子どもの個人的苦痛に正の影響を与えており、仮説3は一部支持された。母親から過干

渉を受け、自分の意思ではなく母親の意思に従って行動してきた子どもは、自分で判断をする場面において何をしたら良いのか、緊急事態においてどう対処したら良いのかといった自らの意志決定を迫られた際や、他者の苦痛を観察した際にどう対処したら良いのかを学習する機会が得られにくいのだろう。その結果、他人の苦痛を見た際に、自身も他者と同様に苦痛を感じたり、不安を抱きやすくなり、個人的苦痛が高まるのだと考えられる。

更に、母親の温かい養育態度と過干渉の両方が大学生の想像性に正の影響を与えることが示された。想像性は物語などのフィクションの登場人物に、自分を置きかえるよう想像する傾向を指す。子どもは母親から温かい養育を受けた場合にはポジティブ感情を頂きやすくなり、過干渉的な養育を受けた場合にはネガティブ感情を抱きやすくなるだろう。いずれの養育を受けた場合にも、子どもは強い感情を抱く経験を繰り返すことになるため、物語の中で示される、登場人物の様々な感情の描写に興味を抱き、引き込まれやすくなり、想像性が高まるのではないかと考えられる。

本研究では、母親の養育態度のみが大学生の共感性に影響を与え、父親の養育態度の有意な影響は認められなかった。これらの結果は、特に母親の養育が子どもの抑うつや精神的健康と関連しやすいという先行研究の知見と一致する(菅原他, 2002; 田中他, 2010; Sato et al., 1997; ただし, Kitamura et al., 1998 では、父親の養育態度のみの影響が認められている)。父親が子どもに与える影響が弱い理由として、父親が子どもと接する時間の短さが挙げられる。例えば、佐藤(2015)は日本とオランダの育児家庭の両親を対象に調査を行い、日本の父親が育児に関わる時間が極端に短いことを示した。父子間の接する時間の短さが、父親の養育態度と子どもの共感性の関連を弱めたのだと考えられる。

次に、大学生の共感性と大学生の向社会的行動との関連について考察する。大学生の共感性のうち、単純相関では共感的関心と視点取得が向社会的行動と正の相関が認められたが、相互の影響を統制した共分散構造分析の結果、共感的関心のみが向社会的行動に正の影響を与えた。そのため仮説4は一部支持された。共感的関心は他者の不運な感情体験に対して同情するなど、他者志向の温かい気持ちを持つ傾向であるため、「思いやり行動」や「小さな親切行動」と言われている向社会的行動と関連するのだと考えられる。この共感的関心と向社会的行動の間に認められた正の関連は、菊池(2008)の結果と一致

する。なお、菊池(2008)は視点取得と向社会的行動にも正の相関があることを見出しており、単純相関では本研究でも同様の結果が得られた。本研究で行った共分散構造分析の結果を踏まえると、視点取得と向社会的行動の関連は共感的関心の影響を介した疑似相関であると言える。このことから向社会的行動は、他者の立場に立って物事を考える傾向よりも、不運な他者に対する同情といった他者志向的感情の抱きやすさによって促されることが示唆される。

なお、大学生の個人的苦痛は向社会的行動に負の影響を与えた。向社会的行動尺度の中には、「家族の誕生日や母の日などに、家に電話したりプレゼントしたりする」といった日常生活における苦痛を感じない行動だけではなく、「ケガ人や急病人が出たとき、介抱したり救急車を呼んだりする」といった緊迫した状況における行動も含まれている。個人的苦痛は、他者の苦痛の観察により自己に生じられる不安や恐怖にとらわれてしまう程度であるため、個人的苦痛が強い者は、その状況に直面した時に強く不安を抱いてしまい、自分が感じる苦痛が強く、他者に配慮する余裕がなくなるため、向社会的行動が減少するのではないかと考えられる。

最後に、両親の夫婦関係が共感性や向社会的行動に及ぼす影響について考察する。両親の夫婦関係の良好さは両親の養育態度のみに影響を与え、大学生の共感性や向社会的行動に直接影響を与えていなかった。また、媒介分析の結果、両親の夫婦関係は、両親の養育態度を介して間接的に大学生の共感性および向社会的行動に影響を及ぼすことが明らかになった。関連して、鈴山・徳田(2009)が行った調査の結果、両親の夫婦関係の認知は家族機能を介して子どもの特性不安と関連しており、直接的には子どもの特性不安に影響を及ぼさないことが示された。そのため、子どもの健康や適応は、両親の夫婦関係を観察するだけでは大きな影響を受けず、夫婦関係の結果生じる家族機能や両親の養育態度といった、子どもに直接関わる変化によって影響を受けることが示唆される。

本研究は、両親の夫婦関係の認知が影響を及ぼす要因や、その過程を示唆した点において、先行研究の限界点を改善した新たな知見を提供したと考えられる。しかし、本研究には以下のような限界点がある。まず、本研究では基本的に、「親」が「法律上の親」、「夫婦」が「婚姻関係にある一組の男女」であることを念頭に置いて検討を行ったが、参加者が想起した親や夫婦が、上記以外の関

係にある者であった可能性がある。今後の研究では、これらが変数間の関連に影響を及ぼしているのか確認することが望まれる。

次に、本研究の調査対象者は大学生のみであり、両親の夫婦関係と養育態度は大学生の報告に基づいて測定された。そのため、測定結果が実際の両親の夫婦関係や養育態度とは異なる可能性がある。実際の両親の夫婦関係と養育態度よりも、大学生自身が認知している両親の夫婦関係と養育態度の方が大学生に与える影響は大きいと考えられるが、より正確に測定された両親の夫婦関係と養育態度が大学生の共感性や向社会的行動に影響を及ぼすのかを検討することも重要である。そのため、両親自身が認知する夫婦関係や養育態度についても測定し、子どもの共感性や向社会的行動に与える影響を検討することが求められる。また、両親の夫婦関係と養育態度については、大学生の16歳までの記憶に基づいて測定しているため、記憶の曖昧さや、現在の夫婦関係および養育態度の影響により、測定結果にバイアスが掛かっている可能性がある。調査対象者を大学生ではなく、16歳未満の子どもに設定することで、記憶の歪みの影響を抑えて両親の夫婦関係と養育態度を測定することができるだろう。

本研究で得られた知見を踏まえると、母親の養育態度を変容することが、子どもの共感性や向社会的行動に肯定的な変化を生じさせる上で有効であると考えられる。また、両親の養育態度を改善するためには、両親の夫婦関係を良好な状態に保つことが重要であることが示唆される。今後は、上記の課題点を踏まえた更なる検討を積み重ね、子どもの共感性や対人行動に肯定的な変化を生じさせるための方法を確立することが求められる。

引用文献

浅野 良輔・吉澤 寛之・吉田 琢哉・原田 知佳・玉井 颯一・吉田 俊和 (2016). 養育者の養育態度が青年の養育認知を介して社会化に与える影響 *心理学研究*, *87*, 284-293

Davis, M. H. (1980). A multidimensional approach to individual differences in empathy. *Journal Supplement Abstract Service Catalog of Selected Documents in Psychology*, *10*, 85.

日道 俊之・小山内 秀和・後藤 崇志・藤田 弥世・河村 悠太・Davis, M. H.・野村 理朗 (2017). 日本語版対

人反応性指標の作成 *心理学研究*, *88*, 61-71

堀 綾華・長谷川 晃 (2018). 親の養育態度が大学生の不登校傾向に及ぼす影響——賞賛獲得欲求・拒否回避欲求および対人ストレスを媒介変数として—— *東海学院大学紀要*, *12*, 29-39.

嘉手納 悟・今井 章・嶋崎 裕志 (2004). 女子学生における親子関係と摂食障害傾向 *健康心理学研究*, *17*(2), 32-41.

菊池 章夫 (1988). 思いやりを科学する——向社会的行動の心理とスキル—— *川島書店*

菊池 章夫 (2008). 社会的つながりの心理学 *川島書店*

Kitamura, T., & Suzuki, T. (1993). A validation study of the Parental Bonding Instrument in a Japanese population. *The Japanese Journal of Psychiatry and Neurology*, *47*, 29-36.

Kitamura, T., Kijima, N., Aihara, W., Tomoda, A., Fukuda, R., & Yamamoto, M. (1998). Depression and early experiences among young Japanese women: Multiple facets of experiences and subcategories of depression. *Archives of Women's Mental Health*, *1*, 27-37.

Muthén, L. K. & Muthén, B. O. (1998–2017). *Mplus User's Guide. Eighth Edition*. Los Angeles, CA: Muthén & Muthén.

西出 隆紀 (1993). 家族アセスメントインベントリーの作成——家族システム機能の測定—— *家族心理学研究*, *7*, 53-65.

Parker, G., Tupling, H., & Brown, L. B. (1979). A Parental Bonding Instrument. *British Journal of Medical Psychology*, *52*, 1-10.

櫻井 茂男・葉山 大地・鈴木 高志・倉住 友恵・萩原 俊彦・鈴木 みゆき…及川 千都子 (2011). 他者のポジティブ感情への共感的感情反応と向社会的行動、攻撃行動との関係 *心理学研究*, *82*, 123-131.

佐藤 淑子 (2015). ワーク・ライフ・バランスと乳幼児を持つ父母の育児行動と育児感情——日本とオランダの比較—— *教育心理学研究*, *63*, 345-358.

Sato, T., Uehara, T., Sakado, K., Nishioka, K., Ozaki, N., Nakamura, M., & Kasahara, Y. (1997). Dysfunctional parenting and a lifetime history of depression in a volunteer sample of Japanese workers. *Acta Psychiatrica Scandinavica*, *96*, 306-310.

- 菅原 ますみ・八木下 暁子・詫摩 紀子・小泉 智恵・瀬地山 葉矢・菅原 健介・北村 俊則 (2002). 夫婦関係と児童期の子どもの抑うつ傾向との関連——家族機能および両親の養育態度を媒介として—— 教育心理学研究, *50*, 129-140
- 鈴山 可奈子・徳田 智代 (2009). 夫婦関係および家族システムの機能状態が青年期の不安に及ぼす影響 家族心理学研究, *23*, 1-11
- 高橋 直美 (1998). 両親間および親子間の関係と子どもの精神的健康との関連について 家族心理学研究, *12*, 109-123
- 田中 麻未・高橋 雄介・酒井 厚・眞榮城 和美・菅原 ますみ (2010). 思春期の抑うつと親の養育態度との関連における縦断的検討 日本パーソナリティ心理学会第 19 回大会発表論文集, 115.
- 宇都宮 博 (2004). 両親の夫婦関係に関する認知が子どもの自己肯定に及ぼす影響——女子青年の場合—— 健康心理学研究, *17(2)*, 1-10.
- 宇都宮 博 (2005). 女子青年における不安と両親の夫婦関係に関する認知——子どもの目に映る父親と母親の結婚生活コミットメント—— 教育心理学研究, *53*, 209-219.

Influences of parental marital relationships on empathy and prosocial behaviors in undergraduate students: Child-rearing styles of parents as a mediator

Mika Yamauchi¹ & Akira Hasegawa²

¹Graduate School of Human Relations, Tokai Gakuin University

²Faculty of Human Relations, Tokai Gakuin University

Abstract

The influences of marital relationships and parents' child-rearing styles on empathy and prosocial behaviors in undergraduates were investigated. Undergraduate students (N = 226) completed measures assessing each variable above. Structural equation modeling indicated that parents' marital quality was positively associated with caring for children and negatively associated with the over-protection of children. In addition, care by the mothers was positively related to empathic concern and the Fantasy Scale score of undergraduates, whereas the over-protection by the mothers was negatively related to personal distress of students. Mediation analyses indicated that parents having good marital relationships indirectly increased empathetic concern of students via the increased care by the mothers, and decreased personal distress in students via decreased overprotection by the mothers. Furthermore, empathetic concern in students was positively associated with their prosocial behaviors, whereas personal distress was negatively associated with their prosocial behaviors. These findings suggest that the relationship of parents' marital quality with empathy and prosocial behaviors in undergraduate students is mediated by maternal child-rearing style.

Keywords: marital relationship, child-rearing style, empathy, prosocial behavior